

## 「若い人たちの死を悼んで」

### 詩編 90 編 1～12 節

政治経済学科特任教授 菊地 順

キリスト教では、伝統的に、11月1日を「聖徒の日」と呼んで、亡くなられた人たちを覚える礼拝を守ってきました。聖学院大学でも、それに因んで、毎年11月1日に近い日の礼拝を、亡くなられた人たちを覚える礼拝として守っています。今年、皆様の関係者の中にも、亡くなられた方がおられるかもしれません。聖学院大学の関係では、大変残念ながら、政治経済学部1年生のUさんが、この夏、ご病気で亡くなられました。まだ18歳の若さでした。心から、哀悼の意を表します。また、もうお一人、大学の関係者が亡くなられました。それは、この大学の設立に寄与した元理事長の大木英夫先生です。93歳と11か月余りのご生涯でした。年齢からしますと、天寿を全うしたご生涯であったと言えます。大木先生とは、40年近くのお交わりがありましたので、多くの思い出がありますが、それはまた別の機会にお話ししたいと思います。今日は、若くして亡くなられたUさんについて、思いを馳せたいと思います。と言っても、わたしは、残念ながら、Uさんのことを個人的には存じ上げていません。しかし、その死の痛ましさは、痛感いたします。と言いますのも、聖学院大学では、この34年余りの歩みの中で、数名の在学学生や卒業生を天にお送りしているからです。そして、わたし自身、その何人かとは直接の交わりがあり、そのご家族とも悲しみを共にしました。その悲しみが、今回、また繰り返されたことを思いますと、何とも申し上げる言葉がありません。また、10日ほど前には、お隣の韓国で悲惨な事故が起こり、多くの若者たちが圧迫死で亡くなりました。若い人たちも亡くなるのです。それは、年寄りに限ったことではないのです。そのことを、改めて、私たちは知らしめられたのではないのでしょうか。

おそらく、学生の皆さんにとっては、死とは縁遠い話ではないかと思えます。しかし、今も触れましたように、皆さんの先輩たちの中には、在学中に亡くなった方々が複数おられます。また卒業して、そう日が経たない内に亡くなられた人たちもいます。その人たちのことを、今日は改めて思い起こし、若い人たちの死を悼みたいと思います。今日お話しするのは、3人の人たちのことですが、これは以前、この礼拝でもお話したことがある人たちです。改めて、その人たちのことをお話して、若い人たちの死を悼みたいと思います。

わたしは、聖学院大学に奉職して今年で31年目を迎えています。この間、わたし自身にとって最も衝撃的であったのは、今から27年前に亡くなったS君の死です。S君は、1995年に人文学部の欧米文化学科に入学した学生で、とても意欲的な学生でした。そして、間もなくして、アメリカン・フットボール部に入部しました。いくつかスポーツ・クラブを考えたようですが、大学にしかないクラブということで、アメリカン・フットボール部に入りました。そして、熱心にクラブ活動に励んでいました。しかし、その矢先、入部してそう日が経たない6月に、タックルの練習中に事故に遭遇し、その月の26日に亡くなりました。18歳の若さでした。ご両親やご家族の悲しみ、またアメリカン・フットボール部の仲間

たちの悲しみと動揺、わたしたちの受けた衝撃、警察の取り調べ、悲痛な葬儀のことが、今でも鮮明に思い出されます。警察の検証の結果、事件性はないとの判断が出ましたが、一人息子を亡くされたご両親の痛手は大変深いものでした。毎月、亡くなられた 26 日には、お墓参りをし、ご両親にご挨拶するという対応が、それから始まり、それは 4 年近く続きました。初めは、ご両親にお会いするのが、こちらとしても苦痛でしたが、しかし段々と心を開いて下さるようになり、次第に大学にもいろいろ関心を持っていただけるようになりました。そして、元気であれば卒業を迎えたであろう 1999 年の 3 月に、S 君を憶える記念碑をグラウンドに立て、また卒業証書をご両親にお渡しすることができました。今でも、その記念碑がグラウンドに立っていますので、見ていただければと思います。

さらに、今から 18 年前の 2004 年に、2 人の卒業生が相次いで亡くなったことも、深い悲しみと共に、思い起こされることです。一人は、2004 年 5 月 1 日に、もう一人は 6 月 10 日に亡くなりました。5 月に亡くなったのは、N 君という欧米文化学科の卒業生でした。N 君は、わたしの授業を取っていましたが、何よりも N 君のお父さんが、聖学院の関係者でしたので、個人的にも良く知っていました。その彼が、5 月 1 日に突然亡くなったのです。仕事の過労からきた突然死であったと聞いています。28 歳という若さでした。そして、それから 1 か月後の 6 月に、H 君という人間福祉学科の卒業生が亡くなりました。夜勤明けの帰宅途中に運転していたクルマが大型トラックと衝突して帰らぬ人となったのです。まだ 24 歳の若さでした。在学中は、いろいろな団体に属し、大いに活躍してくれた学生でした。そして、何よりも屈託がなく、人懐っこい人でした。そういう思い出深い卒業生が、相次いで亡くなったのです。この時の衝撃も、未だに忘れることはできません。S 君といい、N 君といい、H 君といい、皆本当に若くして亡くなりました。また、それだけではなく、もう一つ、この 3 人には共通していることがあるように思います。それは、今紹介したように、3 人とも真剣にそれぞれの人生を生きていたということです。

27 年前、S 君が亡くなったとき、大学で追悼の礼拝を持ちました。そのとき、私が奨励をさせていただきましたが、そのとき、こういうことを申し上げました。それは、S 君の死は、真剣に生きたゆえの死であったということです。S 君は、大学に入ってからすぐにアメリカン・フットボールのクラブに入り、毎日熱心にクラブ活動に励んでいました。彼は本当に喜んで、毎日熱心にクラブに参加していたのです。そして、その熱心な取り組みの中で事故に遭遇したのです。もし彼がクラブに入っていなかったら、事故に遭うことはなかったでしょう。またクラブに入っている、いい加減にやっていたならば、やはり事故に遭うことはなかったかもしれません。しかし、彼はそうした生き方をしなかったのです。熱心に、大きな喜びと夢をもって取り組んだのです。そして、言うなれば、それゆえの死であったのです。しかし、この死に遭遇して、わたしたちは襟を正される思いがしました。いい加減に生きる風潮が蔓延していた世の中で、真剣に生きたゆえの死というのは、わたしたちに真実に生きることの尊さを改めて思い起こさせてくれたといってもよいと思います。一体、いい加減に生きていて、それで本当に生きていると言えるのでしょうか。S 君は真剣に生きたのです。そして、それゆえの死であったのです。ですから、彼は、死んだというよりは、生き抜いたのです。ややもすると、いい加減に生きて、どこかで生ける屍のような人生を送ってしまっている人が多い現代において、真剣に生きる尊さと真実さを示してくれたのです。わたしには、そう思えてなりません。そして、S 君だけではなく、亡くなった 2 人の卒業生たちも、同じ生き方に連なっているのではないかと思います。

もしいい加減に仕事をしていたら、N君の死もなかったかもしれません。仕事でも家庭でも、もっと手抜きをしていたら、彼の突然死はなかったかもしれません。しかし、それで本当に生きたと言えるのでしょうか。N君は、卒業後、しばらくの間世界中を一人で旅行したと聞いています。自分の目で世界をしっかりと見詰め、自分の生き方を探りたかったのだと思います。いい加減には生きられなかったのです。その後、就職をし、結婚をし、子供も与えられ、ますます熱心に仕事にも取り組んでいたのです。そして、その矢先での死であったのです。H君の場合も、同様ではないかと思えます。おそらく、夜勤明けで疲れていて、クルマの運転を誤ったのではないかと思えます。H君は、先ほども触れたように、明るい屈託のない学生でした。話し好きで、だれからも好かれる学生でした。そして、いつもマイペースで、我が道を行くといった感じでした。彼は、新潟県出身で、当時、たまたま私の神学校時代の同級生がそこで福祉関係の仕事をしていましたが、学生時代には帰省する度にそこに手伝いに行っていたようです。生きていれば、いい福祉の仕事をしたのではないかと思われれます。N君もH君も、クリスチャンでした。だから人一倍熱心に生きたとは言いませんが、しかし、彼らの生き方の背後には、そのことも深く関係していたのではないかと思えます。

27年前、S君の追悼礼拝を行なった時も、先ほど読んでいただきました詩編の90編を読みましたが、この10節には、「人生の年月は70年程のものです。健やかな人が80年を数えても」と記されています。今日お話しした3人の若者は、70歳どころか10代、20代という若さで亡くなりました。それは、あまりにも短い人生であったと言えるかもしれません。しかし、その生き方からすれば、それは尊い人生であったと言えるのではないのでしょうか。そこには、目標はそれぞれ違っても、真剣で熱心な人生の取り組みがありました。生きるに値する人生がありました。そして、それは今、彼らの遺産としてわたしたちに残されているのです。わたしたちは、この若い人たちの死を知らされて、ただ悲しみ嘆くだけでは足りないと思います。またその人生の短さを驚き、戸惑うだけでは、その死を知った者とはならないと思います。わたしたちは、この若い人たちの死に出会って、わたしたちの生き方を今一度深い悔い改めをもって顧みなければならぬと思います。そして、その真剣な真実の生き方に倣う者とならなければならぬと思います。12節には、「生涯の日を正しく数えるように教えてください。知恵ある心を得ることが出来ますように」と記されています。生涯の日を数えるとは、人生が80年だとすれば、まだ60年ある、50年あると計算することではないと思います。むしろ、必ずや人生の最期がやってくることを深く自覚し、今という時を真剣に、また熱心に生きることなのです。今日という掛け替えのない一日をしっかりと生きて行くことなのです。そして、そのことが、唯一、彼らの死の悲しみを乗り越え、また彼らと共に歩むことでもあるのです。

今日は、わたしが出会った3人の若い人の死についてお話ししましたが、その真剣に生きたゆえの死は、多くの若い人たちの死にも当てはまるのではないのでしょうか。そして、この夏亡くなられたUさんの死も、そうであったのではないかと思えます。今日は、そうした若い人の死を覚えつつ、またその死を悼みつつ、わたしたちは改めて、わたしたちの人生が限りあるものであること、それどころか、今日という日も、永遠に過ぎ去って行く一日であることを覚えながら、一日一日を大切に、また真剣に生きて行きたいと思えます。

2022年11月10日 聖学院大学全学礼拝 召天者記念礼拝